

イベリコ豚保護へ スペインで植樹活動

西成の 専門店 生息場所と餌確保

【広域】

最高級イベリコ豚専門店のタイシコーポレーション（西成区、山本真三社長）がスペインで植樹活動を続けている。イベリコ豚が育つ「デエサ」と呼ばれるコルク櫪の森の喪失を防ぐため、今年も2月に1500本の苗を現地の牧場に寄贈した。6年間で累計6478本を植え、2018年にはスペイン・アンダルシア州政府から表彰を受けている。
（木下功）



スペインの牧場にコルク櫪の苗を植え、水をかける山本社長（タイシコーポレーション提供）

同社はスペインに直営農場を持ち、イベリコ豚の貿易事業を営むとともに、大阪と東京にイベリコ豚専門店「IBERICCO-YA」を2店舗ずつ展開している。

イベリコ豚はデエサに生息し、デエサの実であるドングリを食べて成長する。生ハムなどの加工業は古代ローマ時代から続くスペインの伝統産業で、同様に伝統産業であるワインのコルクにもコルク櫪は活用されている。

コルクは合成樹脂などで代替が進み、イベリコ豚農家も高齢化。乾燥地域のため山火事への懸念もあり、伐採によってデエサは年々減少している。

デエサはドングリの実をつけるまで40年を費やし、

上質のイベリコ豚を育てるためには、樹齢100年以上のドングリの実が必要。同社が販売する「レアル・ベシヨータ」という称号を持つイベリコ豚は、血統100%の原種であり、樹齢200年以上の栄養価が豊富なドングリを食べて育つことが条件とされる。

同社はイベリコ豚の普及を通じてデエサとスペインの伝統産業を保護することにも、同社の売り上げの中から、店舗での飲食客一人につき10円、通販商品買い上げ時に10円を植樹資金に充て、毎年2月に寄贈している。

山本社長は「先代である父がスペインと日本の両政府に働きかけて、イベリコ豚の輸入に成功した。父の志を受け継ぎ、イベリコ豚を通じて、たくさんの方がとっさにつくりたい」と話す。